

大平正芳「的中した予言」

中嶋 「日中国交樹立四十周年」の今年、本来ならば祝賀ムードに包まれ、両国でさまざまな記念行事なども催されていたはず。しかし、尖閣問題をきっかけに、激しい反日デモなどが起こり、日中間はこれまで以上に緊迫しています。

しかし、この四十年間を振り返ると、自国の利害ばかりを言い募る中国に、日本がよいように振り回されてきた四十年間ではなかったか。その意味で、日本の対中外交を「正常化」する

ために、今一度、原点である一九七二年の日中共同声明を振り返ってみる必要がある。そう考え、今日は、大平正芳外相の秘書官として、日中交渉の現場に立ち会われた森田さんと、当時を振り返り、現在の日中関係について考えてみたいと思います。



田中角栄(左)と周恩来

「四十年後に苦勞する」大平正芳「的中した予言」

戦後最悪の関係に陥った日中対立——一九七二年の正常化交渉は何を間違えたのか

森田 一 × 中嶋 嶺雄
(元衆議院議員) (国際教養大学理事長・学長)

日本人と中国人「宿命の対決」大特集

大平氏

森田氏

中嶋氏

なぜ分かり合えないのか
なぜ暴動に走るのか

日本人と中国人 大特集「宿命の対決」

国交回復40周年は日中激突の年となった。領土、歴史、経済——
軋み続ける両国の関係を浮きぼりにする！



中国漁船衝突事件



中国の正場



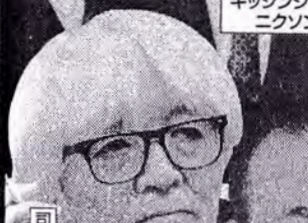
文化大革命



田中角栄首相と大平正芳外相



キッシンジャーとニクソン(右)



司馬遼太郎氏



田中角栄氏



大平正芳氏

習近平



反日暴動



胡錦濤

2012

した。これをどう解決するか。そして三つ目が日中国交問題だったのです。

中嶋 一九六四年二月、池田内閣の外相だった大平さんは国会答弁で早くもこう答えていますね。

「国連におきまして中共政府が国連に加盟される、世界の祝福の中にそういう事態が起こりますならば、当然わが国として重大な決心をせなければならぬのは、これは理の当然だと私は思います」と。

これは非常に重大な発言でした。あとで詳しく述べたいと思いますが、戦後、日本は中共（北京政府）すなわち現在の中国ではなく、台湾の中華民国と平和条約を結び、大変深い関係にありました。北京政府を認めるということは、台湾政府との断交を意味します。これをどうするか。実は、これは現在にも禍根を残す大問題でもあるのです。

森田 そうそう。この頃から大平はずっと日中国交問題をどうするか考え続けていましたね。彼は大変なゴルフ

好きで年に百回以上プレーしたこともありましたが、その行き帰りの車でも、この三つのどれかが口について出るほどでした。政治家大平にとっての「三つの十字架」だったのです。

だから、一九七二年七月、盟友の田中角栄さんが首相になり、外務大臣に任じられた時には、いよいよ中国に取り組もうと腹は決まっていた。

そのとき、最大の問題となったのは、実は、今問題となっている尖閣などではありませんでした。最重要課題だったのは、中嶋さんが言われた「台湾問題」。そして「賠償問題」です。

中嶋 当時、台湾は国連の常任理事国で、建前上、中国を唯一代表する国でした。日本の政治家、外務省でも台湾支持が主流派だったのです。正式に国交を結んだ国を一方的に切り捨てることが信義に悖るの言うまでもなく、また法的整合性もとれません。

森田 そこに「賠償問題」が絡んでくるわけですね。台湾の国民政府は、平和条約を結んだときに一切の戦時賠

償を放棄しています。だが、北京政府は賠償放棄を認めるだろうか？そこが大きな争点になっていた。

中嶋 私がここで問題にしたいのは、「日中共同声明」に至るまでがあまりにも事を急ぎ過ぎたのではないかと、という点です。何しろ七月七日に田中内閣が発足して、九月二十五日に田中首相・大平外相が北京入り、二十九日には国交樹立の運びとなる。こんなに急ぐ必要がどこにあったのか。

森田 よく指摘されるのは、いわゆるニクソン・ショックですね。前年の一九七一年七月に、突然、ニクソン米大統領が訪中の予定を発表します。それまで北京政府と「敵対」していたアメリカが外交政策を一変させたのですが、日本の外務省が内報を受けたのは発表のわずか三十分前。直前まで何も知らされなかったのだから、外務省や政治家の多くは引っくり返るほど驚いていました。

でも、大平は特に慌てた様子はなく、さもありなんという感じだった。

というのも、当時、中国はソ連との関係が、政治路線の違いや領土紛争のために、ものすごく悪化していた。「中ソ核戦争が起きるのではないか」などという予測も出るほど緊迫した事態が続く中で、中国はアメリカとの関係改善が急務になっていた。大平は、そうした流れを見据えていたのでしょう。

中嶋 そういえばそのころ、『諸君！』の連載「香港通信」で「米中接近はあり得る」という自分なりの予測を書いたことがあります。ニクソン・ショックの前でした。

いま森田さんが言われた分析には、私も同感です。当時、アメリカそして日本との関係修復を焦っていたのは、むしろ中国でした。当時、毛沢東は北方領土について「千島全体が日本の領土だ」と発言していたほど、日本の支持を求めています。だからこそ、じっくり時間をかけて、さまざまな問題を詰め、日本に有利な合意を作っていくべきだったと思うのです。

現にアメリカは七二年二月にニクソ

ンが電撃的に訪中しましたが、国交を樹立したのは七九年一月のことでした。実に七年近い歳月をかけて、対中外交を練り上げていったのです。しかも、その際に、台米関係を特別扱いする「台湾関係法」を議会の圧倒的多数で可決しており、これが現在の台米関係の基礎になっている。

森田 私は大平のお伴で、台湾で蔣介石・宋美齡夫妻とさして二時間ほど会食したことがあるんです。一九六四年七月の事でした。どんなことを話したかは忘れてしまいましたが（笑）。蔣介石は大変な好々爺という印象でした。また、宋美齡というと、戦前、アメリカで熱弁をふるって抗日を訴え、絶大な人気を博した、というイメージが強いから、さぞ弁の立つ女性だろうと思っていたら、物静かで二、三言しか口を開かなかった。

このとき、よく覚えてるのが、蔣介石が私と大平にそれぞれ同じくらいの回数、話しかけたことです。つまり逆に言えば、大平は蔣介石とちょっと

距離を取っていた。言質を取られないように話していた感じですね。思えば、この頃すでに台湾との関係に深入りすまいという決意があったのかもしれない。

「国内は角栄、外交は大平」

中嶋 では、七二年七月、いよいよ田中・大平コンビで国交正常化が動き出した時点で話を進めましょう。

森田 実は、田中さんの念頭にあったのは、あくまで選挙のこと、党内政治のことだったんですね。というのは、この年の自民党総裁選で、日中国交樹立は大きな争点になり、福田赳夫さんとの決選投票の際、田中さんが三木武夫さんと大平に「中国問題にケリをつける」と約束して票を取りつけたのです。党内をまとめていくためには、日中交渉に着手せざるを得ない。もうひとつは日中問題を解決したら、次の選挙に勝てる（笑）。それが角さんの最大の動機だったんです。この見

込みは外れて、この年十二月の総選挙では自民党は議席を減らしてしまうのですが。

中嶋 なるほど、まさに「国内問題は角米、外交は大平」だったんですね。

森田 しかも、田中さんは大平に「訪中して失敗したら、総理を辞めなければいけないのじゃないか、七月に内閣が成立して九月に訪中するというのはどうかねえ」と及び腰で、なかなか決断しなかった。それを、大平が「私がちゃんとやりますから」と尻を叩いたというのが本当のところですよ。

一方、大平は七月七日に初登庁したその日から、着々と準備を進めます。外務省の橋本恕、中国課長を呼びだして、「田中と俺が訪中する。極秘に進めるから、そのお膳立てをしてくれ」と命じ、それから毎日、昼間は大政室で橋本さんと議論し、夜は新橋の料亭・栄家で、党内きつての中国通の古井喜実衆議院議員に疑問点をぶつけていました。

中嶋 先ほど、外務省内でも台湾派

ね。「尖閣列島の領土問題」の存在を語り、「日本の侵略」という言葉も入っています。

しかし、田中・大平はもちろん、一緒に行かれた森田さんも大変緊迫した状況だったのでは？

森田 党内の意見調整も不十分のままでしたからね。大平にも田中さんにも右翼からの脅迫状が送り付けられたそうです。大平は遺書をしたためていました。

「『迷惑スピーチ』の内実

中嶋 九月二十五日の午後から北京で交渉が始まるのですが、やはり台湾問題が最大のネックになりましたね。

森田 中国側は、「日華平和条約は不法にして無効」と主張してきたのですが、日本としては、国会の議決を得て批准した条約を「不法」とすることは出来ない。そこで「日華平和条約は、国交正常化の瞬間、任務を終了する」という立場を主張したのですが、

が主流だった、という話がありました。が、トップの事務次官、法眼晋作さんからして、初めは反共の台湾派でしたからね。

森田 そうなんです。しかも、いわゆるチャイナ・スクールの北京派となると、今度は「日米安保より中国との関係を重視せよ」といった議論になり、これもうまくない。主に尽力してくれたのは高島益郎条約局長、栗山尚一条約課長といった人たちでした。

中嶋 栗山さんは後に条約局長、事務次官、駐米大使などを務めますが、国連代表部やアメリカ局などが主な担当といえる。こうした人脈からも、大平さんが日中国交正常化を急いだ背景が垣間見えますね。

森田 そこで大きかったのは「竹入メモ」でした。公明党の竹入義勝委員長が訪中し、七月二十七日から三日間続けて周恩来と対談し、有益な情報を持ち帰ってくれたのです。

それによると、周恩来は「日米安保は正常化の支障にならない」、「尖閣列

いきなり暗礁に乗り上げてしまった。そして、晩餐会で「『迷惑スピーチ』事件が起きるのです。」

中嶋 田中首相が壇上のスピーチで、「我が国が中国国民に多大の迷惑をおかけしたことについて、私は改めて深い反省の念を表明するものであります」と述べたのですが、この「『迷惑』」を中国語に訳すと「添了麻煩」。これは「うっかり迷惑をかける」という意味で、たとえば女性のスカートにうっかり水をかけたときなどに使うお詫びの言葉だ、というので、中国側が激しく抗議した。

森田 私は中国語を解しませんが、ともかくスピーチがその箇所にきた途端、会場がザワザワッとどよめいたのは覚えてます。

これにはふたつの原因があったように思います。一つは日本国内への配慮。もっと強い言葉で謝意を表すと、今度は日本国内のタカ派を刺激してしまう、というので、田中・大平も、外務省の事務方も気を配っていた。そこ

島の領土問題も妨げにならないと思う」などと譲歩を示したうえに、国交正常化に必要な「復交三原則」を強調しました。

- ① 中国政府はこの国を代表する唯一の政府である
- ② 台湾は中国の一部である
- ③ 日華平和条約は不法であり、破棄すべきである

なかでも、大平をいちばん喜ばせたのは、「日本の侵略に対する賠償請求権は将来の日中友好を考えて放棄するつもりである」という一節でした。たとえばインドネシアに対する戦時賠償の基準を中国に当てはめたら、その額は天文学的な数字になる、とても無理だ、というのが大平の認識だったのです。このメモを見て、田中さんも「わかった。中国に行く」とついに決断しました。だから、賠償問題と領土問題に触れない、というのは、この交渉の大前提だったのです。

中嶋 しかし、今日の目でみると、周恩来の表現は非常にしたたかです

で「『迷惑』」という言葉が選ばれたのだと思います。

また人手不足、準備不足の面も否めません。自民党内にも外務省内にも親台湾派が多いという状況下で、極秘かつ少人数で事が進められていましたから、スピーチの文言にまで、十分に手が回らなかったという面もあったのではないでしょう。

中嶋 しかし、これも見方によっては周恩来の交渉上手ぶりが際立ちますね。翌日の首脳会談で、まず「『迷惑』」発言に怒髪天を衝かんばかりの抗議をし、田中首相の釈明を聞いていったん怒りを収める。これで一つ「貸し」をつくった恰好になりますね。

森田 周恩来の剣幕に、大平も一瞬青くなっていましたね。そして、次は矛先を高島条約局長に向け、外務省の解釈は間違っていると攻める。

台湾問題が一段落すると、今度は「戦争状態の終了」を問題にしました。中国側は、この共同声明まで戦争は終わっていないと認めろ、というわ

けです。これには大平も困り果てていました。会談を終え、日本代表团に夕食が運ばれてもなかなか箸をつけようとしな。ところが角さんだけはマオタイ酒を啜り、陽気にみんなに話しかけるんです。

中嶋 この有名な場面は、田中、大平という二人の政治家の個性がよくあらわれていますね。

森田 角さんは「こういう修羅場では大学出たインテリはダメだな」とニタニタしながら言う。すると大平が珍しく「だったら明日からどうすればいいんだ」と色をなすと、「そんなこと、俺に聞くなよ。それは大学を出たヤツが考えろ」。それで一座は大笑いになった。私も気持ちがいぶん軽くなったのを覚えています。田中さんはさらに「ここまで来たら譲歩なんてする必要はない。いよいよダメなら荷物をまとめて帰ればいい。観光に来たと思えばいいさ。後のことは俺が責任を持つ」とハッパをかけた。

ここで大平も「同床異夢」で解決す

僚なんですね。

中嶋 私も、周恩来については痛烈な体験があります。時代は遡って、一九五〇年代、周恩来は私にとって憧れの人物でした。インドネシアのバンドン会議で、アジア、アフリカの植民地支配を脱した国々を集め、平和を訴えた周恩来は、まさに輝くような存在だったのです。

森田 ああ、当時はそうでしたね。

中嶋 そして一九六六年十一月、「孫文生誕百周年」のイベントが北京の人民大会堂で開催された。日本からも中国友好団体の幹部などが招待され、私もその大会に何とか参加できた。すると、そこに国家主席の劉少奇と、総書記の鄧小平が遅れて登壇するんです。しかも誰からも拍手がない。新華社や人民日報のカメラマンも彼らを写さない。つまり、文化大革命で彼らはすでに失脚し、晒されていたわけです。

そこに、周恩来が最後に演説をしたのですが、これが彼らを強く弾劾する

る以外にないと決心したようです。中国側は台湾との断交を共同声明に乗せたがりましたが、大平は共同声明でなく「外相談話」で言及すると主張し続け、粘りに粘った末にそれを周恩来に認めさせたのです。また「戦争状態の終了」については、「これまでの不正常な状態は終了する」という表現で合意を取り付けました。

直立不動の周恩来

中嶋 大平さんは、中国をどのような評価していたのでしょうか。

森田 戦時中、大蔵省に在籍していた大平は興亜院連絡部に出身し、内蒙の張家口に一年半ほど勤務したことがあります。そこでアヘン税を徴収する仕事をさせられていた。当時のことを尋ねると、一言「嫌だった」と語っていました。自分是中国での体験で、日本はやはり海洋国家だとわかった。大陸には向かない」と語っていたのが印象的です。

中嶋 後年、首相として「環太平洋連帯構想」などを打ち出す大平さんらしい話ですね。周恩来、毛沢東への人物評はいかがでしたか。

森田 周恩来については、「きめの細かい、読みの深い人だ」と語っていましたが、毛沢東に会ったとき、同席した周恩来がとにかく直立不動で、絶対服従の姿勢を示していたのに驚いていましたね。「あの周恩来が……」という感じでした。中国の権力関係の凄まじさを感じたのでしょうか。

私自身がそれを感じたのは、外相会談です。大平と会談する姫鵬飛外交部部長（外務大臣に相当）が、交渉の最中に頻繁に中座するんですね。その間、十分、十五分と平気でほったらかしにされるんです。何をしているかというところ、どうも交渉内容が周恩来の意向に合っているかどうかを確認しているらしい。さらには周恩来も、毛沢東の意向に背いていないか、電話などで確認しているようなんです。外務大臣といっても、周恩来の前では単なる下

内容なんですね。「いかなる偉大な革命家でも、毛主席に背く輩には未来はない」と言って毛語録を振り回すのを見て、私の憧れは崩れ去りました。劉少奇は顔面蒼白、鄧小平は、周を「今に見てろ！」という形相で睨みつけていました。

森田 今のお話で思い出したことがありますよ。共同声明の調印が北京で終わった後、周恩来が「上海に行こう」というんです。ところが角さんはああいう人だから、用が済んだらすぐに日本に帰りたい（笑）。それを周恩来が「自分の専用機を出すから」と説得し、なんとか田中さんと大平を連れで行った。後で分かったのですが、これは上海を拠点にしていた江青ら四人組の面子を立てるためだったのです。

中嶋 もともと彼らは上海幫と呼ばれていましたからね。

森田 その機内で、角さんは周恩来を前にしていびきをかいて寝てしまっているですね。神経が太いのか、さすがに疲れたのか……。

上海では交渉は一切行なわれず、宴会だけでしたが、どういうわけか角さんは、周恩来の酒の相手を大平にさせたんです。ところが大平はビール一本で真っ赤になるような下戸。日本国内のパーティでは注がれた酒をこっそり受取って、全部私が飲んでいった（笑）。マオタイ酒を十数杯吞まされた大平は、ホテルに戻るやいなや、ワイシャツ姿のまま倒れ込むように寝てしまいました。あんな大平を見たのはあの時だけでしたね。これも後で知ったのですが、盛大に酒をふるまい、自らがんに侵されていて、飲んでいたのは水だったそうです。約三年半後に、周恩来は他界しますが、日中両首脳ともに精力を使い果たした交渉だったことは間違いありません。

中嶋 実は、田中首相、大平外相が帰国した九月三十日、私は先に話に出た国際関係懇談会に出席していたんです。そこに、大平外相を羽田空港に迎えたばかりの法眼事務次官がきて、

「今回の日中国交正常化は百点満点どころか、百二十点つけられる」と胸を張ったのは、正直呆れました。もともと日中交渉に批判的だったのに、その変わり身は何なのか、と。法眼さんはそもそもソ連嫌い、それが次第に親中に傾いていったのでしょうか。

田中首相、大平外相をはじめ、大変に難しい交渉を成し遂げたことは、私も認めます。また北京政府との間にきちんとした国交を持たなくてはならなかったのも事実ですが、いみじくも森田さんが「同床異夢」と言われたように、無理に無理を重ねた合意から出発したことが、その後の対中外交の悪しきパターンを作ってしまった。

佐藤内閣でも、日中国交回復への取り組みは進められていました。たとえば、そのひとつが「保利書簡」です。

一九七一年、佐藤首相了承のもとで、自民党幹事長だった保利茂氏が、周恩来首相宛に書簡を書き、美濃部都知事に託して送った。主な内容は「日中関係正常化のために両国政府間の話

し合いを始めた。中国はひとつであり、中華人民共和国は中国を代表する政府であり、台湾は中国国民の領土である」というものでした。その草案を私が書いたのですが、こうして中国の主張を認めながら、台湾との関係も維持する方策を模索していたのです。

翌年一月には、佐藤首相は内閣最後の施政方針演説で、「中国はひとつである」という認識のもとに、今後、中華人民共和国政府との関係の正常化のため、政府間の話し合いを始めることが急務である」と述べました。中国側も佐藤発言を敏感にキャッチし、同年一月下旬以降は「人民日報」紙上から、「日本軍国主義」という言葉がもの見事に消えたのです。こういうところは中国は実に目ざとい。

田中訪中に対しても、私たち国際関係懇談会は、二段階方式を提案していました。まず訪中して両国首脳が会い、互いの議論の争点を整理し、次の二度めの訪中で解決を目指すというものです。

一ジを出していただきましたね。
中嶋 たしかに田中内閣に代わった途端、北風が吹きました。秋波が寄せられました。攻め時を心得ていた。森田 中嶋さんが言われた通り、中国は国交回復を焦っていたと思うのです。焦っていたからこそ、佐藤内閣との交渉を急ぎ、次の田中に賭けた。そこが彼らの師さですね。

中嶋 中国と交渉したたかさは、相手国の内情を調べ上げて、その「弱い環」を攻めてくることです。大平さんの日中交渉への熱意や、田中首相の抱えた党内事情、選挙への構えなども見据えた上で仕掛けてきたのだと思います。

森田 たしかに北京での歓待も、よくもそこまで調べたな、と驚くことが多々ありました。訪中初日に、田中さんが通された部屋には、大好物の台湾バナナと木村屋のアンパンが並べられていましたし、宴席では人民解放軍のオーケストラが、新潟出身の角さんには「佐渡おけさ」、香川出身の大平に

は「金比羅船々」を演奏するわけでした。翌朝の味噌汁に使われたのは、田中さんが飲み慣れた柏崎産の老舗西牧の三年味噌。相手の好みを知らずしてなしの基本、といえばそれまでですが、むしろ、何をどこまで調べられているのか分からない空想のしさを感じたものです。

実際、すべての交渉を終えて、日本に帰国する飛行機のなかで大平はこんな呟きを洩らしていました。
「今はお祭り騒ぎでいいけども、三、四十年経ったら、この中国と付き合うのは大変だよ」と。

したたかな中国外交

中嶋 日中国交樹立の立役者の言葉だけに、千金の重みがありますね。四十年後の今、不幸にしてこの「予言」は的中してしまいました。

まさに尖閣問題は、大平さんが避けたがった「同床異夢」の典型ですね。この問題は、外務省の事務レベルでの

森田 傾聴に値する意見だったと思います。中嶋さんが言われるように、一気に共同声明まで突っ走ったのは拙速と言われても仕方のない面もあった。仮に大平が首相であれば、もっと慎重に運んだかもしれません。

しかし、政治家・大平としては、もしこの機を逃したら、日中国交回復は大幅に遅れてしまうという判断があったのだと思います。二段階方式で、いろんな問題を持ち帰ると、自民党や外務省の親台湾、反中国派に正常化交渉自体を潰されてしまう可能性があると考えた。

やはり取り合わせの妙もあったのではないのでしょうか。田中さんが首相だったからこそ、国交正常化の後、党内を抑えることが出来たわけです。角さん人気もあり、「対中友好のバスに乗り遅れるな」とメディアと世論も沸き立っていました。また中国側には、佐藤内閣の慎重な姿勢では時間がかかるという判断があった。だから早くから「佐藤とは交渉しない」というメッセ

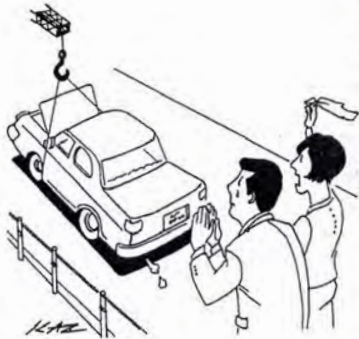
不作為が大きい。そもそも七一年十二月、国交正常化の前年に、中国の外交部が「尖閣は中国領だ」という声明を出していた。それに対して、日本の外務省がきちんと抗議をし、自らの立場を主張していたら、もっと強く交渉を進めることは可能だった。それを放置するから、どんどん中国が言い募ってきたわけですね。

そして、棚上げ論の幻惑です。七九年に鄧小平副首相が来日した折、「尖閣問題は」次の世代、さらにその次の世代で解決すればよい」と語ったことに安心してしまっただけ。しかし、当時の中国は華国鋒政権でしたから、この時点での鄧小平の発言に実権が伴っていませんでした。日本人は気がつかない。その華国鋒が失脚するや、全権を握った鄧小平は態度を一変させ、九二年二月、全国人民代表大会の常務委員会「領海法」を制定し、尖閣諸島を中国の領土に組み入れてしまった。

しかも、同年秋には、天皇・皇后両

UBE
技術の翼と革新の心

え／クロイワ・カズ



三年前、妻と一歳になったばかりの長男を帯同してドイツに赴任しました。

昨年、妻が二人目を懐妊。当地の産院としては定評のあるカトリック系の病院で診察を受けたところ、予定日は六月十五日。外地での出産なので、三週間前から禁酒を誓い、入院に必要なものを愛車に積み込んで、何時でも連れて行くよう準備を整えました。

五月二十九日、会社で飲み会があり、未だ大丈夫だろうと参加。念のためお酒は控えめを心がけました。二次会は近くのカラオケ。興に乗って何曲か歌ったところで携帯に妻から電話です。

「様子が変。直ぐに帰って！」と言います。

慌てて水をガブ飲みして愛車で急遽帰宅。でも、車の調子も変です。ギヤーが上手く入りません。構わず飛ばしました。苦しそうにしている妻を乗せて病院へ急行。予約前の入院なので手続きが大変です。しかも難解なドイツ語と英語で頭の中はパニック。午前三時に陣痛が始まり、妻は分娩室へ。後は祈るのみです。病院の玄関にあった聖母の像を思い浮かべて、

瀬谷 基次(ウベ・ヨーロッパ)

宇部興産株式会社

化成品・樹脂・機能品・ファイン/医薬/建設資材/機械・金属成形/エネルギー・環境
Tel. (03) 5419-6110 http://www.ube.co.jp

No.420



愛車の頑張りで愛息が誕生した話

GERMANY

ひたすら無事出産をお願いしました。

朝六時、男の児を無事出産。我が次男との対面を済ませて、一旦引き上げることにしました。ところが、帰りのアウトバインで突然車のギヤーが動かなくなりまして。アクセルを一杯に踏み込んで四十kmしか出ません。アウトバインで低速運転は危険ですが、非常灯を点滅させながら、何とか我が家に帰り着いたとたん、車も力尽きてダウン。後日修理に来てもらいましたが、廃車と決まりました。愛車にとっては、あの日が最後の御奉公でした。土壇場の頑張りのおかげで、ドイツ生れの次男は順調に成長しています。

陛下の御訪中が予定されていた。尖閣問題に抗議して中国を刺激したくない状況だったのです。なお、当時の中国大使は、中国課長として国交樹立を主導した橋本恕氏でした。

森田 国交正常化交渉そのものは、尖閣の問題はほとんど議論にもなりませんでしたね。

中嶋 今回の尖閣問題で連想したのは、北京政府が国連に正式に認められたアルバニア決議です。

当時、アルバニアは中国と極めて親密な関係にあり、国連に対して、北京政府を安保理常任理事国と認め、台湾の国民政府を追放するよう提議したのです。一九六四年など何度か提議されては否決されたのですが、ついに七一年十月、この決議が通り、国連のメンバーでさえなかった北京政府が常任理事国となる。これに怒った蒋介石は、国連を脱退してしまおうのです。

もし日本が無為無策を続けるならば、これと似たような経緯を尖閣諸島が辿る危険性はないか。本来、何の権

利もない尖閣の領有を主張し続け、国際的な舞台に持ち込むうちに、共同領有などのトリックキーな議論を持ち出し、経緯を知らない国を懐柔して、自分の主張を通してしまおう。現に、中国は尖閣問題を、「軍国主義日本の侵略の遺産」としてアジア諸国に呼びかけようとしている。これは中国外交戦略のひとつのパターンですよ。

森田 たしかに中国は非常にしたたかな外交を展開します。私が憂慮するのは、いまの日本の政治家があまりに脆弱過ぎることです。

大平も含め、かつての日本の宰相たちは外相や蔵相など、国家の枢要なポジションを経験してから、首相の座に就きました。それによって、経験が蓄積し、政策知識を深め、国家の命運を担う胆力を養ってきたのです。

たとえば、大平は日中の前に、やはり外相として日韓国交正常化交渉にたずさわっています。一九六二年、韓国中央情報部長の金鐘泌と会談し、対日請求権を「無償三億ドル、有償二億ド

ルおよび民間信用供与」を提供する経済協力方式で合意を取りつけたのです。いわゆる「大平・金メモ」なのですが、これはほとんど外相である大平の独断だった。事後報告を受けた池田首相はさすがに不満そうでしたが、官邸から帰ってきた大平は「池田が怒ってもちっとも怖くないよ」と笑っていました。

中嶋 それは非常に重要な指摘ですね。大平さんのように、際どい交渉を重ね、痛切な体験を刻んだ政治家がいるうちは、対中外交もしのぐことが出来た。しかし、民主党政権だけではなく、自民党政権でも、末期には、首相がコロコロ代わり、経験不足といえる状態で、政権を担当しなければならぬ不幸が続いていた。そこを今回も中国に付け込まれたのだと思います。

森田 国家間の外交において、タフな交渉能力も必要ですが、実は、国内の権力基盤の強さが非常に重要なのです。そこから立て直さなくては、日本外交は強くなりませんよ。